

## 令和5年度第3回「人権行政に関する懇話会」議事概要

【日 時】 令和6年2月9日（木）15：00～17：00

【場 所】 T K Pエルガーラホール7階 会議室1

【出席者】 ○：懇話会委員

小出委員、新谷委員、野々村委員、八尋委員

●：事務局

人権部長、人権推進課長、地域施策課長、人権啓発センター所長 他

【傍聴人】 なし

【議 題】 福岡市人権教育・啓発基本計画 次期実施計画の策定について  
(事務局より、資料に基づき内容を説明)

### 【発言要旨】

(窓口や制度の周知について)

- 資料2・p68の窓口や制度についても積極的に周知していくとあるが、啓発の新しい視点として入れていくということか。情報の周知は大切である。
- これまでも、人権分野ごとの窓口一覧を市政だよりなどの様々な広報物やホームページへ掲載しているが、さらなる周知を図るため、色々な手法で発信し、周知していきたい。

(教職員の人権教育について)

- 教職員を対象とした事業について、資料2・p77に各種研修の記載があるが、どのような研修なのか。学校の人権教育について、どんな方向性で具体的に何をしていくのか見えにくい。
- 福岡市人権教育研究会（以下、市人研という）なども活用していただきたい。また、実施計画にも市人研についての記載があるとよいのではないか。
- 教職員の研修については、教育センターにおいて、全ての教員を対象に集合型やオンライン等で様々な人権課題についての校外研修を行うとともに、各学校において自校の課題を解決するための校内研修に取り組んでいる。
- 夏季休業期間中等に市人研等主催の全体研修を実施している。教員自らが企画・実施する研修のため、より身近な課題を取り上げることができ、オンライン参加者も含めると、参加人数もかなり増えてきている。

(いじめに関する事業について)

- 資料2・p82「いじめゼロプロジェクト」について、事業目標を「いじめはどんなことがあっても許されない」と回答した児童の割合としているが、いじめはよくないと書くべきであることは分かっていることであり、目標とするのはよくない。いじめを「見たことがない」「受けたことがない」とした割合などを目標とした方がよいのではないか。

○「いじめゼロプロジェクト」などのイベントはあるが、子どもたちにいじめをさせないための取り組みについての記載がない。

(啓発事業の目標について)

- 企業向けの人権研修(資料 2・p100～p101)について、事業目標を参加者の理解度としているが、理解できないと答えた1%の人が、なぜ理解できなかったのかについて見直しをしているのか。
- 知識を習得する研修もあるが、なぜ人権問題がなくなるのかと問いかける学び方で参加者から疑問や質問が出てくることの方が、「理解できた」という結果より重要ではないか。
- 事業目標が100%となったからゴールというわけではない。目標を変えて再評価すると30%しかできていないということもあるのではないか。再評価や総合的な評価などがあるとよいのではないか。
- ワークショップ方式など、参加者から意見が出るような啓発や研修の方がよいこともある。「分からない」「理解できない」とする意見の中に、情報の補充をすべきヒントがある。
- 研修の終わりには質問時間を設けており、アンケート結果だけではなく、参加者の反応を見ながら内容を随時検討しているところである。
- 参加者の理解度については、研修を受けた方が正しい知識や理解を深められたかどうかということであるが、伝え方がよくないなどの原因により、理解できなかったと回答する人もいると考えている。参加者の全員が正しく理解できるという目標の達成に向けて、内容を工夫するなど努めていく。
- 研修では、正しい知識や理解を深めたうえで、一つの考え方だけが正しいということだけでなく、様々な考え方があるということを講師が示して、参加者にも考えてもらうような研修内容としている。

(人権教育・啓発事業の事業について)

- 人権教育・啓発をすることで、人権問題が一步進んでいくと同時に、人権問題を枠にはめて答えを作ってしまうという側面もある。人権問題は日々変化しており、正解はない。それらを踏まえて計画や目標を立てていく必要がある。
- 誤った社会認識により、多数の人の認識の方が誤っていることもある。新しい人権問題が出てきたときは、正しい情報を共有し合うことが大切である。その視点で教育・啓発していただきたい。
- 人権問題について考えることが重要であり、どの問題も様々な意見があり、正解は一つではない。
- 差別と人権の歴史を振り返ると、あれも差別、これも差別とされた時期があった。そういった歴史も振り返りつつ、本当に差別かどうかということも考えていくことが必要である。

○マイノリティの人権が認められることで多様化していくが、そこにも該当しない人がより孤独を感じることもある。一人ひとり、グラデーションがあることに注意しなければならない。